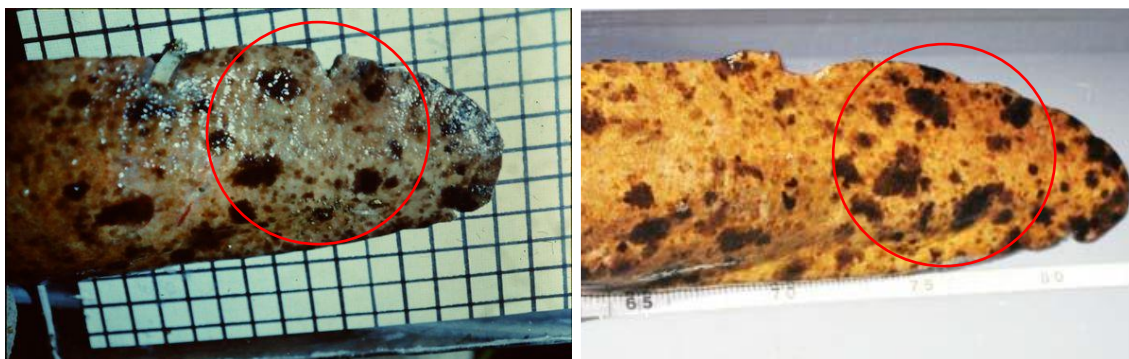




ハンザキの追跡 20 年オーバー 22 個体

ハンザキの生態調査を始めたのは 1975 年のことだ。間もなく 40 年になろうとしているが、この間に市川水系の生野ダムから上流域（本流 10 ㌦、6 支流 15 ㌦）で採捕登録したのは 1,600 個体に達しようとしている。個体識別をして登録できるのは全長 20 ㌦以上の大きさであるから、孵化したときが 3 ㌦でありこれらの外鰓を持った幼生の数は無数に及ぶだろう。個体識別の方法も手探りでいろいろ試みたが、15 年前からマイクロチップを使うようになって確実に識別できるようになったのである。この体内標識はハンザキの左肩に打ち込んでおき、永久的な識別法として 900 個体を上回る登録となっている。読み取り機で 10 桁ほどの数字とアルファベットの組み合わせによる記号を読み取るものである。確実に迅速に識別できるが、一つが 1,000 円と高価なのが欠点だ。



36 年間追跡中の No.110 の左尾部の斑紋 1977 年 (左) 2013 年 (右)

このような個体識別によって 20 年以上追跡できているハンザキが 22 匹となった。これらの内 30 年未満が 14 個体で、30 年を超えるものは 8 匹である。自然界で野生の動物をこれだけ長期にわたって追跡している例は無いのではないだろうか。寿命も年齢推定法も分っていないハンザキである。116 歳とか 95 歳などの数字があげられるが同一個体なのかどうか信憑性が無い例なので、現在の所、幕末にシーボルトがオランダへ運んだ個体が 51 年間飼育されたというのが最長である。中国ハンザキでは日本で 56 年間飼育中という個体が知られている。これだけ有名な生き物なのに寿命が分っていないというのは、人間より長生きするからだろう。研究者一人では対抗できないということだが、マイクロチップによって追跡する人間さえ続けば、いつの日にか解明できるだろう。私の役割はできるだけ多くの個体にマイクロチップを挿入して、若い人へ引き継ぐことだと思っている。

さて、この長期追跡個体であるが、成長程度を見ると遅々たるものである。

登録(全長/体重) 年 (mm/kg)	最終計測(全長/体重) (mm/kg)	追跡期間	成長 (mm)	年平均 (mm)	チップ記号
1977 (850/4.80)	1999(985/8.40)	22年07月	135	6	0125 - A51F
1980 (650/1.76)	2001(760/4.04)	20年03月	110	5	0125 - DD44
1982 (720/2.24)	2005(715/2.30)	22年07月	-5	0	060D - 9831
1983 (620/1.81)	2006(760/4.93)	22年11月	140	6	0125 - DB6C
1988 (660/1.97)	2012(705/2.10)	24年03月	45	2	0125 - ED55
1988 (940/6.49)	2011(1,080/7.95)	22年09月	140	6	060D - 9697
1978 (750/3.20)	2004(780/2.35)	26年03月	30	1	01E0 - 2A7E
1979 (720/2.25)	2004(875/4.55)	25年07月	155	6	0125 - B6A5
1985 (830/2.90)	2013(880/3.50)	26年05月	50	2	0125 - A77A
1986 (720/2.45)	2012(730/2.60)	25年08月	10	0	068B - 81EF
1986 (640/2.42)	2011(740/2.95)	25年02月	100	4	0125 - A1A2
1987 (910/6.08)	2013(960/6.35)	25年04月	50	2	063B - 6B59
1988 (630/2.29)	2013(770/2.40)	25年03月	140	6	0125 - AB07
1976 (690/2.16)	2013(860/3.85)	36年07月	170	5	0635 - 27E8
1976 (750/3.31)	2010(920/6.50)	33年09月	170	5	0638 - 26B2
1977 (685/2.70)	2012(1,040/8.45)	35年02月	355	4	060D - 9325
1978 (615/1.90)	2009(845/6.80)	31年00月	230	7	0125 - DC95
1978 (710/2.60)	2013(830/2.95)	34年10月	120	3	0635 - 2D2E
1980 (830/3.90)	2013(1,090/9.20)	33年01月	260	8	0125 - D068
1980 (660/1.86)	2011(790/2.60)	30年08月	130	4	01E0 - 3AD5
1980 (750/2.75)	2013(880/3.90)	32年10月	130	4	0646 - 6662

このように整理してみると、1年で平均4<sup>ミリ</sup>しか全長が伸びないことが分る。孵化直後が3<sup>ミリ</sup>ほどで外鰓が消えて変態が終わるのに5年で20<sup>ミリ</sup>くらいになるが、この間の年平均成長率は34<sup>ミリ</sup>なので変態終了後の成長が大変厳しいことが分る。これでは全長が150<sup>ミリ</sup>に達するには単純計算で330年もかかってしまう。シーボルトがオランダに運んだ個体は年齢不明だが全長が70<sup>ミリ</sup>以上であり51年間の飼育によって120<sup>ミリ</sup>ほどで死亡したと言われている。1年に1<sup>ミリ</sup>くらい伸びており、飼育下での比較的良い成長を示しているものの150<sup>ミリ</sup>に達するにはまだ30年くらいの時間が必要になる。ハンザキは100年くらい軽く生きるだろうと思っているが、150年なのか200年かかるのか、やはり300年かかるのかなんとか知りたいものだが私だけでなく、今生きている人にも時間が足りないようだ。



写真1 アユの煮びたし



写真2 ハンザキ橋上のヒキガエルのロードキル



写真3 モリアオガエルの卵を食うイモリ



写真4 マレーシアの子供たちの餌やり



写真5 ポルネオのオランウータンの野生復帰ステーション  
(1979.9 マレーシアにて35才の頃)



写真6 夜間のモニターでカルガモ一家



写真7 クチベニマイマイの綱渡り



写真8 酒の肴パティラ (A:メス B:オス)



写真9 昼間も漂うカモガワハンザキ



写真10 ケラ



写真11 ヘビトンボ



写真12 米国土産ハンザキ・ラベルのコーヒー

## カワセミ三兄弟

理事 黒田哲郎

「アカショウビンがいますね」

「え? そうなんですか?」

「キョロロロと笑うような声がしていましたよ」

というような会話を黒川に来られた動物写真家の福田幸広さんと交わした。

そういえばこのところ、林の中で何度か聞いた鳴き声はそれだったのか。

火の鳥と言われる鮮やかなアカショウビンは、てっきり南の方の鳥だとばかり思っていたが、夏でも涼しいこの黒川に生息しているとは驚きだった。



ヤマセミ (ハンザキ研にて)

日本でよく見られるカワセミ類はヤマセミ、カワセミにアカショウビンを加えた三種類だそうだ。

ヤマセミ、カワセミは黒川では時々見る事ができる。

中でもヤマセミは比較的高いところを飛び、ギャッ、ギャッとやかましく鳴くのですぐに分かる。そして人の姿を見ると、怒ったような鳴き声で叫びながら、避けるように迂回して飛んでゆく。だが一度は、川で大根を洗っている時に、叫びながら私に向かって急降下してきた。自分の飛ぶルートに私がいることに気付くのが遅れたようで、方向転換できずにそのまま私の頭の上を飛び去って行った。



カワセミ (黒川本村にて)

一方カワセミは比較的水面に近い所を飛んでいる。こちら川で鍋を洗っている時に間近をブルーの塊が通ったと思ったら近くの石の上に止まり、こちらを気にすることもなく水中をうかがっている姿を見ることができた。だが、わずかにでも動くとすぐに逃げたしまい、じっくり観察させてくれないところが残念である。

どちらの鳥も、数は多くないもののここに棲んでおり、黒川では彼らの生息に良好な環境が維持されていることがうかがえる。そしてたびたび出会えるわけではないので出会うことが出来た日には嬉しくなる。子供の頃、黄色のフォルクスワーゲンを見たらその日はラッキーな日になる、というのがあったが、まさにそんな感じである。

調べてみるとアカショウビンは渡り鳥とのこと。今年もまたアカショウビンが黒川にやって来て、あの鳴き声を聞かせてくれることを楽しみにしている。そしてあわよくば写真を撮れないものかと思いを巡らせながら散歩している。

## イスラムの国からの客

兵庫県立人と自然の博物館の恒例となった夏休みのマレーシアへのサマースクールが中止となった。同国の治安が悪化していることが原因らしい。その代りとしてマレーシアから子供たちを招待して日本の子供たちとの交流も兼ねて国内で実施されることになったが、その一環としてハンザキ研への見学があった。4人の子供と引率の保護者を含めて30名ほどが来所した。日本語から英語に、そしてマレー語への通訳が必要になるのでどうなることかと心配したが問題は無かった。レクチャー後、プールでのハンザキへの餌やり体験では引率者も含めてハンザキの食いつりに歓声を上げていた。その昔、インドネシアとの動物交換でコモドドラゴンを頂き、代わりにハンザキがジャカルタの動物園に贈られたことがある。機会があつて、ジャカルタの動物園に見学に行ったが池の水面には氷がビッシリと浮いていてハンザキの姿を確認することはできなかった。熱帯の国での飼育の苦労は分るが残念なことだった。

マレーシアの子供たちにとっても神秘の国、日本の巨大な両生類との対面は初めてのことだったろう。最初はなかなかうまくいかなかったが、要領が分ると次々に餌を食わせることに成功し、生臭い冷凍アジを餌やり棒の先にセットしては友達に撮影を頼んでいた。日本の子供たちも全く変わらない状況で大いに楽しんでもらえたようだ。お礼にマレーシアのお茶のプレゼント・セレモニーではとっさに「テレマカシー」と言ったらマレーシアの子供たちから歓声が上がった。私は数十年前にインドネシアやマレーシアでウミガメの調査をする機会があつて、その時に覚えた“ありがとう”というマレー語が役立ったということだ。もういくつも覚えていないマレー語ではあるが、“ありがとう”という言葉と心の持ちようは大切なことだと改めて思った。

ところで、イスラム教を厳しく守っている人々にとっては豚肉やアルコールなどの他に、礼拝の時間など日本人にとってはなかなか理解しにくい習慣も多い。これは文化の差であつてどちらがどうということではないが、見学に来られた時に礼拝のための部屋があるかと聞かれたのにはびっくりした。幸いにも教室の一つが和室に改造されて畳の部屋になっていたので使っていただいた。韓国で犬を食うのは残酷だとかタイやヒラメの活け造りも日本人は残虐な人種であると言われる。中国ハンザキの姿煮で大皿のスープから頭部と尾部が見えている中国料理の写真にはギョッとしたが、日本にもハンザキの食習慣はあつたのである。しかし、宗教的な面での日本人のフアジーな点は突出しているのではないかと思う。岡山県湯原温泉では毎年、8月8日に“はんざき祭り”が開催される。観光協会のイベントなので仕方ないと思うが、大きなハンザキの山車を引きまわすだけの祭りだ。イベントの開催に当たっては“ハンザキ大明神”の前で神官と僧侶がそろってお祓い?を行う。何とも日本的な宗教行事ではなかろうか。私は無宗教人間でお寺や神社へのお参りはしないので宗教についてのコメントはしないが、クリスマスもキリスト教の行事を取りこんでにぎやかな行事が行われている。平和な国日本と言うことかもしれない。

## 生き物の名前

ハンザキとはなんだと聞かれることが多い。オオサンショウウオの昔の図鑑に出ている標準和名(単に和名と言われることが多い)であると答えると怪訝な顔をされる。現在の標準的な動物図鑑である“新日本動物図鑑”(1965年北隆館刊)で使われているのはオオサンショウウオである。しかし、同図鑑の前身である“日本動物図鑑”(1927年刊)ではハンザキになっている。私が姫路市立水族館を退職した時に、旧生野町立黒川小学校に“日本ハンザキ研究所”と名付けたのは短い歯切れの良い響きもあってのことだ。そして、和名はその生物の特徴を如実に表現するものが良いと考えるからだ。つまり、体の幅いっぱいを開くハンザキの口は正に半分に裂けているかのように見える。半分に裂いても死なないと誤解されることも多いが、半分に裂くと死ぬので裂かないでくださいとお願いしている。

日本爬虫両生類学会や日本動物園水族館協会では混乱を避けるために和名を統一している。無論オオサンショウウオとしているが、日本特産の生き物には“ニホン”とか“ニッポン”を最初に付けようという申し合わせがある。まあ、サルやシカでは種そのものを表現しがたいのでニホンザルなどと呼んだ方がいいだろう。イシガメがニホンイシガメと呼びかえられたりする例であるが、昔から親しまれて広く使われていた名前が急に変わると戸惑いが起こる。水族館にイシガメとニホンイシガメとはどこが違うのかという電話質問があったが、こんな訳があったのです。しかし、ニホンオオサンショウウオと言っている人はいないようだ。長い名前がさらに長ったらしくなり使いにくいからだろう。作文していても繰り返し出てくると煩雑で字数がやたらに増えてしまう欠点もある。私はもっぱらハンザキと称しているが、和名は標準的に使われるものであって、ラテン語(現在使われていないために変化しない)で表現される学名は命名法が決まっていて、勝手に変えることはできない。ハンザキは“アンドリアス ジャポニクス”(日本の大きなイモリ)と命名されている。和名をハンザキに戻したいと思うのですが、私の声はまだまだ小さいようです。

ところで、生物学者が命名した和名には困った問題がある。ババガセやジジガセは軟体動物のヒザラガイの仲間である。説明されないと分らないかもしれないが婆の背・爺の背(汚らしい?)の意味であり、昆虫のウスバカゲロウは薄い(透明な)羽を持ったカゲロウなのだが薄馬鹿下郎と勘違いされることがある。その他にも水槽の解説で困るのはアンコウの仲間のイザリウオ(居座り・・・足の悪い人のような歩き方の魚)とか熱帯魚のメクラウオ(洞窟生で目が退化した魚)などの差別的な言葉が付けられた例がある。ウーパールーパーとしてテレビで人気が出たメキシコサンショウウオは、昔から幼型生殖(外鰓を持ったまま幼生の姿で繁殖)する動物として教科書にアホートルと言う名で知られていたのだが、阿呆な年寄りだということで、けしからんと言われることがある。いずれにしても、昔の偉い方々が付けた面白半分な命名は困った問題で言い換えが考えられているが、差別する心の存在が問題なのである。メクラウオはメナシウオと和名が変えられているが、これらの問題点は今までにも何回も取り上げられてきたのだが、名案がなかなか出ないのも現実のようだ。

ハンザキ研日誌

2013年7月

- 2日 アメリカ・ハンザキのシンポジウムより帰国 (岡田副理事長、田口理事)
- 3日 カラス対策で釣り針セットするもカラスの方が賢い
- 5日 鳥取県八頭土木事務所より来所
- 7日 ボランティア作業 5名参加 (ポンプピットの浚渫, 飛び石整備など)
- 8日 ハンザキ保護センターに水中覗き具セット
- 10日 姫路市生物多様性戦略検討会開催
- 13日 岡山大学医学部生 5名来所
- 14日 落雷で一時停電 (ガス湯沸かし機とエアコンが自動復帰しない)
- 16日 カルガモ一家が夜間モニターに (11羽から 5羽に減っていた)
- 17日 NHK取材(ニュース KOBE 発、ぐるっと関西おひるまえ)
- 18日 ・キノコ定期定点調査  
・養父市立建屋小学校 15名と引率 3名
- 21日 公開見学会 7組 22名、スタッフ 6名
- 23日 やまびこの郷 14名と引率 5名
- 24日 兵庫県立大の餅井研他鳥取大、奈良教育大など見学に 20名
- 25日 宍粟市坂田氏と神戸動植物環境専門学校生 15名見学に
- 22日 安威川ダム委員会(大阪市にて)
- 26日 田口理事夜間調査、12個体計測内新規 3個体
- 27日 ・事務局会議 11名出席  
・オオサンショウウオ夜間観察会 12組 32人参加、スタッフ 18名  
・岡田副理事長他夜間調査で 12個体計測内新規 1個体
- 30日 ・キノコ定期定点調査  
・ヒキガエルのロードキル (ハンザキ橋上で)
- 31日 ・生野中学校生 2名ハンザキの勉強に  
・兵庫県立人と自然の博物館より来所、マレーシアからの 5名も参加

.....

ハンザキ所長のツブヤ記録

ハンザキの成長速度は気の遠くなるような数値だ。これまでも野外で5年以上追跡できた個体の成長について整理したことがあったが、年に1%成長するのは良い方であり、5年10年とまったく全長が変化しない個体も結構いるのだ。逆に縮んでしまう例もありそうだが、こんな生き物を相手にしたのが不運だったのかもしれないものの、誰かがやらねばいつまでたっても日本が世界に自慢できる水生動物の謎は解けない。調査研究する人間の側が数代に渡ってバトンをつないでいかねば解決できないのだろう。